

〈目 次〉

○巻頭言	2
○特集 キャリアセンターの就活応援活動	4
○研究室紹介	13
○総科掲示板	23
○OB・OG紹介	29
○REVIEW×REVIEW	39
○飛翔な日々	41
○卒論題目紹介	45
○人事異動のお知らせ	48
○編集後記	49

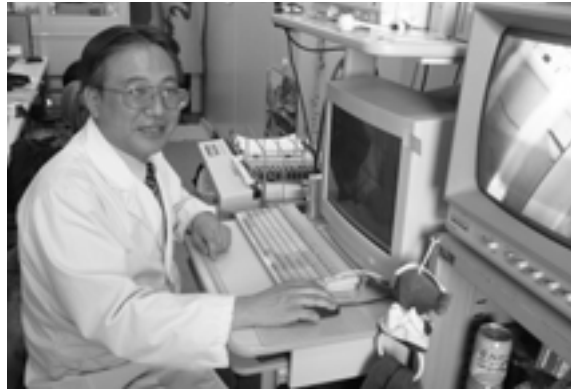
表紙作成

広島大学総合科学部総合科学科2年

田中 実夏さん

巻頭言

「総合科学」のススメ



林 光 緒
(総合科学研究科 研究科長補佐)

私が総合科学部に入学したのは1982年のことだから29年前のことになる。総合科学とは何か、学生時代にはあれこれと考えてみたが、結局はよくわからないまま時間が過ぎていった。最近になってようやく自分なりに分かりかけてきたように思う。

総合科学部の名前を初めて知ったのは、中学生のときだった。なぜその本

を読むようになったのかは覚えていないが、おそらく、数百冊のSF文庫を所蔵していた兄の薦めだったのだろう。「宇宙船ビーグル号の冒険」(原題 The Voyage of the Space Beagle, A. E. ヴァン・ヴオークト著、1950年、沼沢治治訳、創元SF文庫、1964年)という本の中にその名前があった。この船の名前は、ダーウィンが乗っていた探検船に由来する。様々な分野の科学者が約千名乗船する宇宙探検船に未知なる生命体が次々と襲い掛かる。しかし、予算も研究スペースも人員も多く抱えた各学部の科学者達はそのような新しい状況に対応できない。その中で人員がたった一人しかない総合科学部に所属する主人公が、孤軍奮闘して難題を解決していくという物語である。なお、1978年にハヤカワ文庫から発刊された同訳本「宇宙船ビーグル号」(浅倉久志訳)では、総合科学ではなく情報総合学という言葉が用いられている。ネクシヤリズムという言葉の訳としてはこちらの方がしっくりくるような気もするが、この本はやはり、「総合科学」でなければなるまい。

続いて総合科学部の名前を目にしたのは、高校1年の頃だったように思う。受験雑誌を見ていたときだった。びっ

くりした。総合科学部なんて物語の話であり、本当にあるとは思ってもしなかった。あの頃はあまり深く考えもせず、進学先はこじかないと決め込んだ。しかし、そうは思っても能力が足りないことは明らかで、入学を許可していただけるのに1年余分にかかった。

そうやって長年あこがれてきた総合科学部ではあったが、入学しても能力のなさは変わるわけもなく、大学の授業自体、ついていくのがやっとのこと。これではひとつの学問分野を学ぶことすらままならず、いわんや種々の学問分野を俯瞰し総合するなんて到底不可能で、総合科学部に入学した意味もいつの間にか忘れてしまっていた。

2年生のコース決めでは、複雑系を学びたいと思った。人間の行動原理が最も複雑であるように思えたので、心理学を専攻しようと思った。幸い希望が適い、当時の情報行動科学コース第Ⅲ群に所属することとなった。これは現在の行動科学プログラム行動系に相当する。2年生のとき脳波の実習があり、 α 波を見た。なぜこんな綺麗な現象が人間の頭から出てくるのかとても不思議に思った。さらに3年生になり、睡眠脳波を見る機会が訪れた。睡眠脳

波を見てみると、人間の意識状態の変化がリアルタイムでありありと見て取れる。そのときから睡眠脳波のとりこになり、卒論は堀忠雄・大名誉教授（現福山通運渋谷長寿健康財団睡眠研究所所長）のご指導のもと、睡眠をテーマに選んだ。そして、そのまま修士・博士課程へと進んだ。

修士論文や博士論文では、学術的な意義が問われ、オリジナリティが重視される。いきおい研究は先端に尖ることになる。しかし、当時、様々な教員から、おまえの研究は狭すぎる、と言われ続けた。その当時は言われていることがよくわからず、最先端の研究を行えばそうなるのは仕方ないと開き直っていた。そのあと総合科学部の教員に採用された。今では恥ずかしい限りだが正直に告白すると、当時、総合科学部は就職先としか見ておらず、「総合科学」という考えは頭の中になかった。しかし、自分の学問基盤であるはずの心理学の学会に参加してもそこにアイデンティティは感じられず、まるで根なし草のようなもどかしさも感じていた。

その後、1996年から6年間、堀教授が科学技術庁の大型研究プロジェクト「日常生活における快適な睡眠の

確保に関する総合研究」の班長に就任され、一緒に短時間仮眠に関する共同研究を始めた。このプロジェクトは、精神医学、生理学、生化学、心理学、公衆衛生学、人間工学、家政学、スポーツ学、情報学など様々な学問分野を背景にもった睡眠研究者が集まり、どのような方略をとれば快適な睡眠を得ることができのかを明らかにし、その研究成果を国民全体に還元することを目的として設立されたものである。毎年の成果報告会に参加させていたのだが、どの研究も大変面白く、わくわくした時間の連続だった。

このプロジェクトの班員を中心として「睡眠学 *Somnology*」の創設が提唱され、2002年、日本学術会議で新しい学問分野として認められることとなった。睡眠学とは、睡眠に関連するあらゆる研究領域を含む広域複合科学であり、まさに総合科学である。先プロジェクトのように睡眠を研究する様々な学問分野の研究者だけでなく、睡眠に関心のある一般市民も参加することが、睡眠に関する諸現象の解明だけでなく、我々の生活の向上にも寄与することになる。これこそ自分が求めていたものであり、これまでの胸のつかえがとれたように感じた。自分は

やはり総合科学を目指していたのだと。

結局、自分がどの「学問分野」を学びたいかではなく、自分がどの「現象」を学び明らかにしたいかが大切なのである。その現象の解明には、無数のアプローチが存在するはずである。学生時代、自分の見方が狭かったのは、たった一つの物差でしか物事を見ようとせず、いろんな視点からその現象を捉えようとする姿勢がなかったところにその原因がある。あのときに指摘していただいた先生方と同じような歳になって、ようやくそのことが見えてきた。もし自分が総合科学部にいなければ、そのようなことを言われることも、また自分がそれに気づくこともなかっただろう。

総合科学部に新たに入学した学生諸君、すでに数年間、総合科学部に在籍している学生諸君、一緒に総合科学を目指そう。君達は総合科学部で何を学びたいのか、何を学ぼうとしているのだろうか。長いようで短い4年間、自分が探そうとしているものを見つけよう。きっとその先に君達を目指す総合科学があると信じている。